

カセサート大学単位互換プログラム報告書

獣医学類 5 年 川西雄大

タイでの 5 週間の実習が終わり、カセサート大学（以下 KU）留学も残り半分となりました。この 5 週間で学んだ 3 つのユニットと休日について紹介させていただきます。第 5,6 週目の Bovine ユニットの後半のレポートでまとめて紹介させていただきたいと思います。

Swine ユニット（第 1 週 10/22-10/26）

まず座学では、タイにおける豚の飼養状況や具体的な飼養方法について学びました。留学最初の授業だったこともあり、英語の講義についていけるか非常に緊張していました。実際に受講してみると、自身の英語力の至らなさを痛感すると同時に、「ついに留学生活が始まった」という高揚感を覚えた、印象深い授業となりました。

続く農場訪問では、タイの大規模農場を見学しました。この農場では、妊娠、哺乳、哺育、肥育の 4 ステージ（段階）ごとに豚舎が明確に分けられており、それぞれが清潔に管理されている様子が印象的でした。現場で実際に使用されている設備や給餌内容を直接目にすることで、座学で得た知識への理解が一層深まりました。

病理解剖の実習では、農場で実際に疾病に罹患した子豚が数頭運び込まれました。中には神経症状を呈している個体も含まれており、深刻な状況を目の当たりにしました。剖検所見から PRRS（豚繁殖・呼吸障害症候群）が強く疑われ、その後、採材した検体を用いた検査でもウイルスの検出が確認されました。ユニットの最後には、北海道大学と酪農学園大学の学生が合同で最終プレゼンテーションを行いました。発表後、先生方から非常に多くの質問が寄せられ、質疑応答を含めて一つのプレゼンテーションに 3 時間もかかったことには、大きな衝撃を受けました。KU の学生は日常的にプレゼンテーションを行う機会が多いようで、ペーパー試験が評価の中心となりがちな日本との教育スタイルの大きな違いを痛感しました。



先生と豚農場の方たちとの集合写真

Aquatic ユニット(第 2,3 週 10/29-11/10)

アクアユニットでの 2 週間は、日本では学ぶ機会がほとんどない内容ばかりで、すべてが新鮮な経験となりました。本ユニットでは主にティラピア、エビ (White leg shrimp、Giant freshwater prawn)、観賞魚 (ベタなど) について学びました。

授業の大半は実際の養殖場訪問にあてられ、飼育環境、餌、エアレーションの仕組みなど、座学で学んだ理論を現場で確認するという形式で進められました。(残念ながら、実習の第 1 週目に私自身がインフルエンザに罹患してしまい、いくつかの授業と実習に参加できなかったことが心残りです。)

タイではティラピアやエビは日常的な食材であり、ほぼ毎日口にするほどです。ユニットで生態や養殖方法を学んだ後は、マーケットやスーパーでそれらを見る目が少し変わりました。

座学では、エビやティラピアの特性や生活サイクルに加え、オープンシステムやクローズドシステムなどといった各飼育システムの特徴を学びました。養殖場訪問では、エビの習性によって異なる飼育方法を比較理解しつつ、実際に訪問先でエビを採取。その後、大学に戻って病理解剖と採血を行い、その養殖場の問題点について考察を実施しました。特にエビの採血は、日本ではまずやることがない、非常に貴重な経験となりました。

ティラピア養殖場では、タイ国王からの表彰を受けたこともある優良な施設を訪問することができました。そこでは他の養殖場とは異なる In pond raceway system という広い池に生簀を浮かべて飼育する方法が実践されており、高効率かつ高品質なティラピアを生産する現場を見学することができました。

観賞魚として、ベタの養殖場にも伺い、ベタが入った個別の瓶が床一面に広がる光景は壮観でした。ベタの繁殖方法や雌雄差による飼育方法の違いなどペットショップでよく見る魚がどのように繁殖され店頭に並んでいるのか初めて知ることができました。



エビは心臓または
腹側の神経横から採血します



In pond raceway system
大きな池に生簀を並べティラピアを
飼育しています



ベタが入った瓶が並べられています

Exotic ユニット(第4週 10/13-10/17)

このユニットは、私が留学前から特に楽しみにしていたものの一つです。1週間の実習期間中、「猛禽類リハビリセンター」「野生動物レスキューセンター」「KU エキゾチック診療科」の3箇所を訪問しました。(当初予定されていたエレファントクリニックは、残念ながら症例がいなかったため訪問は叶いませんでした。)

初日は学内の猛禽類リハビリセンターを訪問し、フクロウやトビの身体検査および採血をさせていただきました。この施設は、野生の猛禽類を保護・治療し、野生復帰させることを目的としています。私たちが検査を担当したのは、飛行不可能なために施設で終生飼育されている個体たちでした。保護される理由で最も多いのは交通事故による外傷だそうです。その治療費は主に募金によって賄われています。しかし、運営は厳しい状況にあるとのことで、寄付の必要性を強く感じました。

野生動物レスキューセンターでは、国立公園で保護された直後の、新生子象の治療を見学しました。この象は、両前肢がナックリングを起こし、起立不能となっていました。現場には国立公園のレンジャーやタイ王国職員の獣医師など、各地から専門家が集結していました。治療方針は、超音波療法や末梢磁気刺激(PMS)を用いて筋肉と腱の弛緩を促しつつ、ギプスを用いて前肢を少しずつ正常な位置に矯正するというものでした。また、象の歩行補助には人力では限界があるため、専用の補助器具が用意されていました。その実用性を試験する際、子供の象と体重が最も近い私がモデル役を務めるという貴重な経験もしました。多くの専門家が知識や意見を出し合い、一丸となって象を救おうとする姿に、強い感銘を受けました。

大学病院のエキゾチック診療科では、実際に来院した多様な症例を見学しました。うさぎや鶏(闘鶏用)、カエルやヘビなど、日本では珍しい動物種も多く見られました。特に印

象に残っているのは、急患として搬送されてきた猿の症例です。来院時にはすでに脱力し、意識レベルも低下している危険な状態でしたが、人獣共通感染症のリスクを考慮し、マスクや手袋等で厳重に防御した上で診察が進められました。X線検査や身体検査から重度の脱水と肝腫大が疑われ、残念ながら治療の甲斐なく死亡が確認されました。日本では猿を診療する機会はほとんどないため、採血部位や静脈留置針の設置位置など、他の動物種とは異なる点を多く学ぶことができ、非常に有意義な経験でした。



フクロウの頸静脈からの採血

休日

実習の合間の週末には、タイ各地へ観光に出かけました。バンコク市内のほか、アユタヤ、チャーム、チェンマイ、カンチャナブリなどを訪れました。特に印象に残っている二つの旅を紹介します。チェンマイへの旅行は祝日と重なったため、3日間の日程を確保することができたため、寺院巡りに加え、タイ最高峰であるドイ・インタノン国立公園にも足を運びました。山頂の気温は15℃と非常に涼しく、常夏のバンコクとの気候の違いに驚きました。この旅で最も強烈だったのは、帰路の体験です。チェンマイからバンコクまで価格も安いので13時間の列車移動を選んだのですが、これは想像を絶する長さでした。その上、車内では乗客同士の口論が始まったり、どこからか虫がひっきりなしに飛んできたりと、まさに海外の洗礼を受けるような、非常に刺激的で面白い体験をすることができました。また、カンチャナブリ地方にあるエラワン国立公園では7層の滝に分かれていることで有名で、それぞれの滝壺に入って泳ぐことができる国立公園です。自然豊かで美しい場所で、もっと時間があれば全ての滝で泳ぎたかったです。



エラワン国立公園
1番上の7番目の滝です



去年北海道に留学に来ていた KU の卒業生
とビーチに行きました

まとめ

この5週間は、自分自身の様々な至らなさを痛感する期間でした。特に英語力全般やプレゼンテーション能力において、周囲の学生たちと比較して自分の力不足を強く実感する場面が多々ありました。

一方で、留学当初は苦戦していた英語のリスニングにも徐々に慣れ、実習中に臆せず質問するといった積極性も、少しずつ身についてきたという手応えも感じています。

留学生活も残り半分となりました。この5週間で得た反省や自信を糧に、残りの期間はさらに積極的に発言する機会を自ら増やし、英語力の一層の向上に努めていきたいと思えます。